



紙の辞書

この通信の198・199号で『辞書を編む』（飯間浩明、光文社新書）を紹介したが、またまた似たような話で申し訳ないが、やっぱり私は辞書が好きらしく、岩波新書から出た『辞書の仕事』（増井元、2013）が面白いので紹介しようと思う。筆者の増井さんは、岩波書店に勤務した30余年の間、『広辞苑』や『岩波国語辞典』などの編集に携わった方である。先ずは引用から。

＊

村上春樹さんに「無人島の辞書」という短いエッセーがあります。「もし、無人島に一冊だけ本を持っていくとしたら」という例の設問について、村上さんは軽い冗談を言われたあと、ちょっと真顔で、自分なら「辞書を一冊選ぶ」と書いておられます。「辞書というのはあれでなかなか面白くて人情味のあるものである」と言われるのは、村上さんの場合は外国語の辞書、英和辞典を念頭においての発言ですが、国語辞典にも「なかなか面白くて人情味のある」辞書はあるものだと思います。ただ、「あれで」と言われるところは、「辞書は無味乾燥なもの、面白くて人情味がある辞書なんて知らないよ」という世間一般の常識がいったんは肯定されているわけで、その点はやや不満です。

「無人島へ辞書を」とおっしゃる方はなかなか多くて、一般の人から村上さんのようなことばのプロまで、さまざまな発言があります。また、バリエーションと言えるかどうか、愛用の辞書を棺桶に入れてもらいたいと書かれている作家も複数いらっしゃいます。

辞書を挙げる理由として、まずその情報量の多さが買われていることは間違いありません。読んでも読んでも読み切るのは大変です。例えば『広辞苑』の文字数はざっと1500万字、通常の新書の150冊分です。本文約三千ページの本ですが、思い立ってこれを一日一ページずる日課のように読み進めようと始めると、最後の項目「んとす」の例文「終わりなんとす」に到達するのに8年間かかります。

＊

ところで、ここまで読んで気づいたでしょうか？ 増井さんはこの文章を、電子辞書ではなく「紙の辞書」を前提として書いている。だって、電子辞書なら無人島に持っていったら電池が切れてしまうだろう…というのは揚げ足取りであるが、ページを一日ずつ読むという発想、イヤそれ以前に、辞書を読むという発想は、あきらかにモノとしての辞書が前提になっているのである。

これまた以前にも書いた気がするのだが、例えば「英語があまり得意でない」とか「古文が苦手だ」という人は、いよいよ受験勉強を始めるに当たって、紙の辞書を新調することを薦めたい。確かに電子辞書は便利だが、その利便性とバーターで失っている部分も多いのである。部活の道具が軽くなった分、重いけれども「引く」という身体性を伴う辞書に替えてみたらどうだろう。そんなことが案外実力アップに繋がったりするものだ。繰り返すが、色々やったけどダメだという人ほど、この辞書の新調を考えて見てほしい。今がその最後のチャンスかも知れない。